

あこのありが豆腐

ゝ白い舟ゝ

脚本..万葉

## 登場人物

原田修司・・・劇作家。

岡智

原田弥生／若きあこ・・・修司の娘。

新葉尚

原田千紗・・・修司の妻。

田中由美子

原田和乃<sup>かずの</sup>／ゆかり・・・修司の母／常連客。

江村奈美

洋ちゃん<sup>よう</sup>・・・修司の劇団時代の友人。

ケイスケ

磯崎・・・常連客。

矢尾一樹

褓主<sup>ほろぬし</sup>・・・常連客。

鈴木寿永吉

川澄・・・常連客。

神道明

すず／あこの母・・・常連客。

定岡小百合

しげ・・・常連客。

真山亜子

十蔵・・・常連客。

倉知成満

あこ・・・豆腐の行商。

菅谷晃子

リアカーの車輪が軋む音。

豆腐屋のラップの音。あこがリアカーを引いているようだ。

けたたましいスマートフォンの着信音。

修司

原田です。ええ、プロットは明日。舞台？もういいんです。舞台は、もう書かない。

足早に通り過ぎる修司。ポケットから、くしゃくしゃになった一枚のメモが落ちる。

あこはそれを拾う。

あこ

あの…！

修司の後ろ姿を見つめるが、彼は気づかない。

しげ（声）

お豆腐屋さん。

あこ

はい、今行きまーす！

あこ、行こうとして、磯崎の声に振り返る

磯崎

あこー！味噌汁作りすぎちゃった、飲んでけよ！

あこ

えー？いいよー。

磯崎

いいから！飲んでけつて！待ってるからな！

あこ

はいはい！

裨主

あこちゃん。

あこ わ、こんにちは！

髪主 直したりアカー、引き心地はどうだい？

あこ 最高！ピンクに塗ってくれたんだね、パラソルまで！

髪主 雨も日差しも、ちつとはしのげる。これで旅商人<sub>たち</sub>って感じだろ？

あこ ホロちゃん、ありがとう。修理代を…。

髪主 いいんだ。

あこ なんで、受け取ってよー。

髪主 いつもあこちゃんには世話になってるから。

短い沈黙

髪主 ……ただな。（間を置き、声を低く）八月までしか、直してやれないんだよ。

あこ え？

## 第一場：出会い

小料理居酒屋「大入<sub>おおいり</sub>」のカウンター。

閉店後の照明が少し落とされ、静かで落ち着いた雰囲気。

千紗 洋ちゃん。もうそのへんにしといたら？

洋ちゃん あと一杯！カルーアミルク！

千紗 あかね、ここは和食居酒屋なの。

洋ちゃん うめえんだもん。コーヒー牛乳みたいで。

千紗

子供じゃないんだから。

洋ちゃん

なあ、弥生ちゃん就職したんだろ？修司なんて捨てて、俺とこ来いよ。

千紗

えー？（笑って）どうしようかな。

洋ちゃん

月イチで、バイキング連れてくぞ。ローストビーフ食べ放題！  
バイキングで釣れる歳じゃないのよ。

千紗

小さな笑い。

洋ちゃん

…で、例の話…言つといってくれた？

千紗

お豆腐屋さんの？

洋ちゃん

ああ。

千紗

話したけど…気が進まないみたい。

洋ちゃん

なんでだよ。「金にならない」ってか。

千紗

うーん…。

洋ちゃん

昔は飯抜きで、借金してまで舞台作ってたのに。変わったなあ、（ハッと気づき、千紗の顔を見る）…悪い。

千紗

（優しく微笑んで）いいのよ。事実だし。

洋ちゃん

あいつの書く、むちゃくちゃな芝居…おもしろかったのに。

千紗

私も。舞台上で全裸になったり、血糞まみれになったりね。

洋ちゃん

今じゃ、テレビ用に…無難…にまとめちゃつてさ。

千紗

弥生を授かって、舞台を辞めて…。あの人なりに、慣れない映像の世界で、必死にやってきたんだから。

洋ちゃん

なんか…グッと老けたっつか。それで、いいのかよ。

千紗

徹夜で締切に追われて、身体壊しかけて…それでもいつもお金置いてくれた。

洋ちゃん

けどさ、

千紗

私と弥生がこうして暮らせてるのは、修司のおかげ。…これでいいのよ。

洋ちゃん

…そうか。

千紗

（寂しげに）うん。でも…

洋ちゃん

でも？

千紗

最近あの人…笑わなくなった。

洋ちゃん

芝居の話もしねえしな。

千紗

…それがちよつと、心配。

洋ちゃん

千紗…。

千紗

ごめんね、こんな話。

洋ちゃん

やつぱり、俺と一回バイキング行ってみるってのはどう？

千紗

ばか！

ガラガラと戸が開く音。修司が疲れた様子で帰ってくる。

修司

ただいま。（洋ちゃんを見て）来てたのか。

洋ちゃん

おう。千紗と甘しい時間を過ごしました。

千紗

甘いのはカルーアでしょ。（修司に）ビールでいい？

修司

ああ。

洋ちゃん

（修司に）なあ、考えてくれた？

修司

またその話か。しつこいな。

洋ちゃん

リアカーで豆腐売ってるあこさんって人でさ。雨でも雪でも、決まった時間に街を回ってんだってよ。

修司

ふうん。

洋ちゃん

修司、舞台復帰作！いい題材になると思うぜ。

修司

やらないって。お前が書けばいいだろ。

洋ちゃん

おい。俺が書けないの知ってるだろ？どうすんだよ。豆腐の妖精でも出すか？「とうふりんだよ☆ぶるる、おとうふ買ってぶる」。

修司

子供にはウケるんじゃないか。とうふりん。

洋ちゃん

書いてぶる、って。ほんと、頼むよ。

修司

…いくらだ？

洋ちゃん

（呆れ）そこかよ。

修司

それ以外、何があるんだ。

洋ちゃん

なあ。昔のよしみで言わせてもらうけど…

修司

…なんだ。

洋ちゃん

お前が今書いてる脚本、正直、眠くなるぞ。

修司

…。

洋ちゃん

取材のアポは取ってあるんだ。あこさんのお客さん。

修司

は？なんでそんな、勝手に。

洋ちゃん

ここに来てくれるように、話をつけてある。

修司

だからって！困るよ。

洋ちゃん

なあ、会うだけでいい。…頼む。

戸が開く音。

弥生

ただいまー！

千紗

弥生。早かったのね。

洋ちゃん

（手を振り）弥生ちゃん。

弥生

洋平さん、お久しぶりです！

洋ちゃん

まあまあ、すっかり綺麗になっちゃつて。まるで若い頃の松坂慶子だな。

弥生

（苦笑い）わかんない。

洋ちゃん

変な男にひつかканなよ、松坂慶子も昔、映画監督と不倫して

／

弥生

わかんないつてば。

修司

（千紗に）ビール、もう一本あるか？

千紗

あるわよ。

短い間

弥生

ねえ…お父さん。

修司

…なんだ。

弥生

この前の週末、なんですつぽかしたの？

洋ちゃん

なにに。お前、なんかやらかしたのよ。

千紗

和乃さんの喜寿のお祝い、行けなかったのよ。

修司

…編集でトラブルがあつて、急に尺の調整が入ったんだ。

弥生

おばあちゃん、すごく楽しみにしてたんだよ。

修司

仕方ないだろ。仕事なんだから。

弥生

そういつて、もう何年会いに行つてないじゃん。節目のお祝いなんだよ？東京まで出て来れないんだからさ…

千紗

弥生。お母さんが代わりに行つたから。

弥生

そうじゃないの。せめて、電話くらいすればよかったのに。

修司

心配するな。

千紗

元氣そうにしてらつしゃったわ。

弥生

腰も痛いし、左手が思うように動かないつて。元氣に見せてるだけ。私聞いたもん。

洋ちゃん

年寄りなんて、どこも大体そんなもんよ。

千紗

落ち着いたらちゃんと行きましょ、ね。

弥生

落ち着いたらつていつ？

修司

…。

弥生

お盆も年末も仕事ばかり。…おばあちゃんも、寂しいと思う。

千紗

弥生。

弥生

私が言わなきゃ、ずっとこのままだから。それに…私の授業参観だつて運動会だつて、来たことないじゃん。

修司

おい、いつの話を持ち出してゐるんだ。

千紗

しょうがないでしょ、お父さんは／

弥生

（被せるように）「お父さんは特別な仕事だから」？もう聞き飽きた。

修司

（言い返そうとして口を開くが、言葉が出ない）…。

弥生

いつだつて同じだよ。受験の日も、成人式も…ずっと寂しかったんだよ。

修司

もういい、その話は。

弥生

お父さん！…ちゃんと聞いてよ。

シンとした空気。

千紗

…洋ちゃん、悪いけど。

洋ちゃん

…ああ、今日は帰るよ。弥生ちゃん、力になれることあったら、いつでもな。

弥生

（静かに）ありがとう。

洋ちゃん

修司。…取材、頼んだぞ。

修司

…。

洋ちゃんが戸を開け、去っていく音。

千紗

（弥生に）もう遅いから、寝なさい。

弥生

…うん。おやすみ。

修司

ああ。

弥生が去り、奥の部屋のドアが閉まる音。

修司

（千紗に）俺は、間違ってるのか？

千紗

（何も言わず、優しく修司の手を握る）

## 第二場…磯崎さんの取材

居酒屋『大入』。ざわめきの奥、落ち着いた小上がり。

バラエティ番組が流れている（小ネタシーン？）

十蔵とゆかりが入ってくる。

ゆかり  
ごめんください。

千紗  
はい。（テレビを消し、修司に）あなた。お見えになってるわよ。

修司  
ああ…今日だったか…。（面倒くさそうに）  
もう。

修司  
すみません、わざわざ。原田です。

ゆかり  
いいのいいの。こうでもしないと、お外でご飯なんて食べないでしょ。私はね、ゆかりです。こっちが、十蔵さん。

十蔵  
…鯖の味噌煮、あるか。

千紗  
ええ、自慢の一品です。

十蔵  
熱燗。おちよこつ。

千紗  
はい。

千紗、奥へ

十蔵  
（見直し）カメラは？

修司  
…ありませんよ。

ゆかり  
取材なんて、芸能人みたいねえ。

修司  
まだ、私が書くこと決まったわけじゃありませんから。  
ちえ。めかし込んで損したな。

ゆかり  
この人、今日は張り切ってコロンつけてるのよ。

十蔵  
よしてくれ。

修司 ……お二人は、ご夫婦で？

十蔵 豆腐パーティー仲間。

修司 えっ、なんて？

ゆかり ひとり暮らしだと話し相手がなくてね。あこちゃんが、お友達を作ろうって、集まりを開いてくれたの。みんなで料理を持ち寄って、お酒も少し。

修司 （白けた目で）へえ。

十蔵 お前も来るか。

修司 ……結構です。

十蔵 めっちゃ楽しいのに。

修司 今日は、その…あこさんのことを、お聞かせいただけたら。

ゆかり あの子、本当に働き者だね。この街で引き売りを始めて、もう二十年近くになるかしら。

十蔵 ほんとに。娘みたいだ。

ゆかり いつも私たちのことを考えてくれるの。資格まで取っちゃって。

修司 資格？

十蔵 看取り士。

修司 看取り士……？豆腐屋が、どうしてそんなものを。

ゆかり 磯崎さんのことが、きつかけだったの。

照明がゆっくり落ちていく。ざわめきが遠のき、ラッパの音が微かに響く。

舞台奥に若いあこの姿が浮かび上がる。

小さなアパートの一室。テレビの音だけが響く。

椅子に腰掛けた磯崎、痩せた体でリモコンを握りしめている。

ドアをノックする音。あこが入ってくる。

若きあこ

こんにちはー！

磯崎

おう……来たか。

若きあこ

お豆腐と豆乳、いつものところに入れておきますからね。

磯崎

…。

若きあこ

またニュースですか。今日は選挙の特番？

磯崎

政治家はどいつもこいつもダメだ。口ばかりで何もしねえ。

若きあこ

うーん。

磯崎

こんな奴らのために税金が使われてると思うと、反吐が出る。

若きあこ

もう…磯崎さん。違うの見ようよ。ね？

チャンネルを変えるあこ。テレビの音声が変わる。

磯崎

最近のタレントはろくなのがない。どいつもこいつも似たようなのばかりで、区別がつかねえ。

若きあこ

カーテン、開けるね。今日、すっごいいい天気だよ。

磯崎

（テレビを見て）こんなん見て何がいいかわからん。…どいつもこいつも。

若きあこ

…ねえ、磯崎さん。

磯崎

なんだ。

若きあこ

この際だから聞かせてもらいますけど、

磯崎

だからなんだよ。

若きあこ

もつと楽しい話はないの？

磯崎 楽しい話？

若きあこ ほら、最近食べたもの、とか、大笑いしたこととかさ。

磯崎 ねえな。

若きあこ え〜？あるでしょ一つや二つ。

磯崎 ……楽しいことといえば……毎週おまえが来てくれることくらいだ。

若きあこ それじゃあ、来週までの宿題。

磯崎 宿題？

若きあこ これまで生きてきた中で、一番楽しかった思い出。考えておい  
てね。

磯崎 ……なんだよそれ。

若きあこ 答え、聞きに來ますから！

磯崎 おい、待てよあこ！

明るく手を振り、退場。現代へ。

十蔵 （味噌煮を食べ）うまいな。鯖の脂をちゃんと残してある。

ゆかり そうだ、写真があるのよ。磯崎さんの。

修司 写真？

ゆかり 見て見て。スマホなのよ。

修司 最新のですね。

ゆかり 最初は怖かったんだけどね、あこちゃんが毎週使い方を教えるから大丈夫ですよって。ゆかり、スマホデビュー！

十蔵 電話なんて、通じりゃいいんだ。

ゆかり

はい、これが磯崎さん。ハイビジョンで撮ったの。

回想と現代が交互に。

磯崎

（明るく）たっけえな。豆腐、安くなんねえのか？

修司

いい顔、されてますね。

ゆかり

でしょう？

十蔵

磯崎さんは元々、おしゃべりで賑やかな人だった。走るのが大好きで、マラソンの大会に毎週出てたんだ。

磯崎

（明るく）あっこ、お前汗疹できちまったんだって？しょうがねえやつだな。クリームあるから、塗ってけよ。俺の、いんきんたむし用だけど。いいからいいから！

ゆかり

足を悪くしてから……すっかり塞ぎ込んでたの。

ラッパの音が遠くから響きはじめる。

やがて音が近づき、窓のカーテンが揺れる。磯崎が顔を出す。

磯崎

おい、あっこ！ 早く来い！

若きあこ

どうしたんですか、そんなに大声で。

磯崎

いいから！宿題出しただろ！！

若きあこ

はいはい、今行きますって。

部屋は真っ暗。映写機が回るカタカタという音。

スクリーンに、古びた山登りの映像。笑い声や風の音が重なる。

仲間

おい磯崎、置いてくぞー！

若き磯崎

誰が！一番で登ってやる！

仲間B

ははっ、顔真っ赤だぞ！

仲間C

おーい、こっち！雲が切れたぞ！

映像を指さして

若きあこ

…これ、磯崎さん？

磯崎

ああ。

若きあこ

わあ、かつこいいじゃないですか！

磯崎

だろ？女が寄ってきて、大変だったんだ。

若きあこ

…これは、山？

磯崎

俺、仲間と、しょっちゅう山登りしてたんだ。

若きあこ

へえ…。

磯崎

夜になったら…空が星で埋まってるんだ。そりゃあもう、綺麗なんてもんじゃない。自分が、銀河の中にいるみたいな感じなんだよ。…みんなで黙って、ただ見上げてた。

映写機の声だけが響く。

磯崎

忘れてたよ、こんなに楽しかったこと。

あこ、胸がいつぱいになり、頷く

磯崎

思い出させてくれて、ありがとな。

照明、ふっと切り替わる。

数日後の昼。あこ、ラッパを吹きながら舞台を横切る。しかし窓は閉ざされたまま。静寂。あこの動きが止まる

若きあこ

…磯崎さん？

ラッパを吹く。もう一度。沈黙。あこの表情が曇る。舞台袖に走り、戻ってくる。

若きあこ（声）

（逼迫して）こんなこと、今まで一度もなかったんです。お願いします、お願いします。

鍵の音。ドアがゆっくり開く。照明、冷たい白。

部屋の中で、うつ伏せになった磯崎。動かない。あこが一步踏み出し、息をのむ

若きあこ

磯崎……さん……。

しばし沈黙。あこ、膝をつく。

十蔵

…眠ってるみたいだったそうだ。

修司

第一発見者か…。荷が重いな。

十蔵

溜まっていた新聞は3日分。臭いもなかったと。

ゆかり

ひとりで、寂しかったでしょうね…。

修司

…。

十蔵

それは、俺らが決めることじゃない。

照明が柔らかく変わり、磯崎が生前の姿で立ち上がる。

観客にだけ見える幻のような姿。

磯崎

(穏やかに微笑んで) ……あっこ。

あっこ、泣いている。

磯崎

おい。ったく、聞こえねえのかよ。あっこー！見ろよ。

磯崎、腕をぶんぶん回し、腰を伸ばしながら

磯崎

ほら、体がピンピンだ！ジャンプだってできるんだぞ。

ぴよんと跳ねて、ふと自分の手を見て

磯崎

ってなんだよ。やっぱりしわしわじゃねえか。

あっこ、肩を振るわせ泣く。磯崎、息を吸う。

磯崎

…あっこ。泣くなよ。俺まで泣けてくんדרろ？

間

磯崎

ここだけの話だぞ？…俺あな、あっこのことが好きだった。いや、好きだった。もうちよつと若かったら、結婚してたかな。…くたばっちまったけど。

あこ、ふと顔をあげる。

磯崎

…あっこ、迷惑かけたな。でも…見つけてくれて…泣いてくれて、ありがとうな。

若きあこ

（何かを感じ）磯崎、さん…？

ラッパの音がかすかに響き、照明がゆっくり落ちる。

ゆかり

私たちは寂しいわよ。もっと、声をかければよかったって…。

少しの間

十蔵

…いい人だった。それで十分だ。

ゆかり

いなくなってから…大きさに気づくのね。

遠い風の音。焚き火のはぜる音。笑い声が重なる

仲間A

…おい、見ろ！

仲間B

すげえ…

仲間C

ほんとに、落ちてきそうだな…！

若い磯崎

…きれいだ…。

ラッパの旋律が柔らか重なり、照明がゆっくりと落ちる。

居酒屋『大入り』へ。

十蔵とゆかりは帰ったようだ。千紗は頭に耳のついたカチューシャをつけている。

洋ちゃん

…どうだ。書く気になったか？

修司

(少し息をついて) …ならん。

洋ちゃん

はあ！？今の流れ、完全に書くフラグ立ってたる！

修司

胡散臭い。

千紗

なんてこと言うの！

修司

どうせ年金目当てだろ。それか保険金とか。

千紗

あんたって人は…！

洋ちゃん

ところで千紗。その頭、何？この店売上悪いのか？

千紗

(カチューシャを触り) 十蔵さんがくれたの。

修司

…あの熱爛じいさんが？

千紗

そう。デステニーランド行ったらしいわよ。あこさんと。

洋ちゃん

…二人で？え二人で？

修司

ますます怪しい。パパ活だ。

洋ちゃん

パパっつーか、ジジ活っつーか。

千紗

「死んで幽霊になってから行ってみたい」って言ったら、あこさんが「生きてるうちに行こう」って。ほんとに連れてっちゃったんだって。

洋ちゃん

まじかよ！じいさん俺より青春してんじゃん！

千紗

丸一日はしゃいで、勢いで買ったのがこれ。もう使わないからって、くれたの。

洋ちゃん

戦利品かよ。なんか謎に似合ってるし。

千紗

十蔵さん、ナッキーに会うの、夢だったらしいよ。

修司

…。

洋ちゃん

…なあ。年金目当てで、普通そこまでするか？

修司

なんか、あんだろ。裏が。

千紗

あなた。書いてよ。あこさんの話。…私、読んでみたい。

洋ちゃん

（媚びて）俺も読みたあい。修司先生の新作、早く読みたあい！

修司

…他のやつを書きながらだから…遅くなるぞ。

洋ちゃん

きた！ありがとな修司ー！恩に着せるぜ！

修司

恩を着せるな、着ろ。

新幹線の発車ベル。笑い声がフェードアウトし、弥生の通話。修司の通話と交差する。

弥生

もしもし、お母さん？…うん、今ね、新幹線の中。そうそう、私夏休みとれてなかったでしょ？そしたら先輩が気い使ってくれて。♪日間くらいかな。

修司

この間の取材分、送ったから。ああ…書くことは書いたけどさ。でもなあ…ただの「いい話」っただけで、なんの捻りもない。こんなん客が見て喜ぶか？

弥生

あ、リビングあったお菓子、持ってきちゃった。なんか最中？<sup>もなか</sup>つばいの。ごめんって！また買って返すから！

修司

…え？次の取材？女性客？人？もういいって。そんな周りくどいことするなよ。こんなのさっさと書き上げちまいたいんだから。

弥生と修司の声

弥生

お父さんは忙しいからさ、せめて私くらい、顔見せたいんだ。

修司

本人に会わせろよ。それが一番早い。

#### 第四場…川澄さんの取材

居酒屋『大入』。

意気揚々と喋るすすとしげ。修司は、面倒くさそうにメモをとっている。

すす

最初ね、「なんだこの子」って思ったわけよ！二十歳そこそこの娘がリアカーなんか引いて、ラッパ吹いてるんだから！

しげ

あたしなんか最初、選挙カーかと思った。

すす

あらやだ！豆腐で当選するわけないでしょ！

しげ

しちゃうかもよお？お豆腐で、ご当選！

すす

ちょっと、しげちゃん、うまいじゃない！

二人、大爆笑。

修司

声でかいなあ…。

すす

（聞いておらず）え？なに？

修司

（繕って）いや、あの…お二人は、仲良しなんですねえ。

しげ

いやいやそんなでも

すす・しげ

ないわよ！

修司

…。

しげ 私たちがおしゃべりするのなんて、あこちゃんが来るときだけよ！

すす 週に一度かな。

しげ 週に一度よ。

すす だから嬉しいの。

すす・しげ (謎のハイタッチ) ねー！

修司 あこさんがリアカー引き始めた頃の話、聞かせてもらえます？

すす ああ懐かしい！まだリアカーにパラソル付いてなかった頃よ。

毎日毎日「買ってくださいーい！」

しげ 「おいしいですよー！」

すす・しげ (謎のハイタッチ) ねっ。

(呆れながら書き) …。

すす 雨の日なんてビッショビショ！かわいそうだから、思わず一丁

買っちゃったのよ。

しげ これぞ、清き一丁！

すす 選挙じゃないっての！

しげ 雪の日なんか、家の前まで押してきてくれるのよ？あれは助かったわあ。

修司 そこまでして売るなんて…必死だったんだな。

すす そりゃ必死よ！商売だもの！

しげ でもね、だんだんそれだけじゃなくなった気がするの。…きつと、あの子を変えたのは、川澄さんの存在だったんじゃないかな。

修司 川澄さん？

しげ あこちゃんの、最初の常連客よ。

回想へ。

川澄 よーう、来たか。

若きあこ こんにちはー。

川澄 お豆腐屋さんなのに、いろいろ積んでるんだな。漬物に油揚げ…惣菜まで。

若きあこ お豆腐だけじゃ儲かないから（と言いかけて）川澄さん！これ、信州のお蕎麦です！おすすめ！

川澄 うまいのか？

若きあこ まだ、食べたことないですけど…美味しいですよ。多分、絶対！（上目遣い）買ってくれたら、晃子、嬉しいっ！

しげ （回想を見ながら）見てこの首の角度。立派な商人ね。

川澄 俺はあきちゃんのそばにいたい。そばだけに。

すす （爆笑）そばだけに！そばだけに！！（二人で大爆笑）

修司 そんなに？（ペンをカチカチしながら一瞥）

回想。夏。蝉の鳴く音。

川澄 よーう、来たか。

若きあこ 川澄さん！今日も待っててくれたんですね。

川澄 調子はどうだい？

若きあこ …さつき、「プープーうるせえんだよ！」って怒鳴られちゃって…。

川澄

俺は好きだけどなあ。あの音。昔聞いたラッパみたいで懐かしいよ。でも今は、あきちゃんの音がしてる。

若きあこ

そう、ですか…。

川澄

暑いなあ。アイス、食うか？

若きあこ

えっ、いいんですか？

川澄

頭冷やして、頑張れよ。

若きあこ

…はい。

すず

（若きあこに向かって）この子…あこちゃんに似てないわね。

修司

（いらついで）ご本人にお会いしたことがないので、想像で補ってるんです。

しげ

（若きあこに向かって）あこちゃんに似てないってだけで、あなた美人さんだからね！すずちゃん悪気があって言ったわけじゃないから！

回想へ。冬。

川澄

よう、来たか。

若きあこ

川澄さーん！はい、これ！

川澄

これは？…あ、ねじりん棒だ！

若きあこ

ドーナツだつて！食べたいつて言ったでしょ？駅前パン屋にあつたの。

川澄

覚えててくれたのかあ。ありがとう。

ゆかりの声

（袖から）あこちゃん！

若きあこ

行かなきゃ、じゃあね！

川澄

はい、これ。

若きあこ

ホッカイロ？こんなに…。いいって。

川澄

あきちゃん。頑張れよ。

若きあこ

…ねえ。今度から、リアカーに積んでないものがあつたらなんでも言つてね。代わりに買ってくるし。

しげ

（ナレーション風に）そうして晃子は、次第に、川澄おじいちゃんに、商品を売ることよりも、どうしたら喜んでもらえるかを考えるようになったのであります。

すず

やだしげちゃん上手！声優さんみたい！

しげ

でしょ！！あたし実は（などと続ける）

修司

（遮って）で、その川澄さんは？

短い間

しげ

随分前に、旅立ったよ。

修司

…そうですか。

しげ

あこちゃんが話してた。ある時、川澄さんと一緒にいて、「明日の仕込みどうしよう」って仕事のことがばかり考えてたんだって。

すず

うんうん。

しげ

帰る際にね、川澄さんがいつも通り「ありがとう、頑張れよ」って。

すず

あの人の口癖ね。

しげ

で…数日後よ。ヘルパーさんから電話が来たの。川澄さん、脱水で倒れて、そのまま…。

すず

急だったのよね。

しげ

「今日までしか家にいない」って聞いて、あこちゃん慌ててリ  
アカー片付けて、駆けつけたのよ。息子さんやお孫さんと一緒  
に囲んで、思い出話して。…もう会えないって分かってたら、  
もつと話したかったって…

修司

もう結構です。

しげ

え？

修司

ありがとうございます。

しげ

でも、まだ…

修司

（メモをとりながら）結局人は、老いて死ぬ。それだけのこと  
でしょう。

すず

は？今、なんて言った？

しげ

「それだけ」って…。

修司

ありきたりで、舞台で描くには弱いってことです。

間

しげ

あんたね、この前の原稿、読んだよ。

修司

え、なんで、あいつ送ったんですか？

しげ

磯崎さんが息も絶え絶えで、あこちゃんが泣きながら抱きしめ  
ただの、最後の頼みを聞いただの…！歌舞伎の口上みたいにあ  
ることないこと並べて…！だいたい、「海辺のコテージ」って  
何よ！木造の一軒家でしょうが！

修司

物語として演出しただけです。

しげ

それは、あんたの都合だろ！

間

しげ 磯崎さんは、安らかに眠ったんだ。それを「感動の名場面」に

仕立てて…。

修司 あなた方に、舞台はわかりません。

しげ それが、あんたの商売かもしれない。でもね…。

すず 磯崎さんを知ってるあたしたちには、たまらないよ。

間

すず あこちゃんのこと、磯崎さんのこと、川澄さんのこと…。ちや

んと書いて欲しい。

しげ だから、あたしたちは今日ここに来たんだよ。

修司、言葉に詰まる。そこへ千紗がそつと器を差し出す。

千紗 (差し出し) これ、どうぞ。

修司 …後にしてくれ。

千紗 豆乳プリン。初めて作ったんです。

修司 …豆乳、って…。

千紗 …あこさんから買ったのよ。笑顔でありがとうって、言ってくれた。

修司 …。

照明変化。電話の音。

弥生

……もしもしお母さん！？…おばあちゃんが、玄関で倒れて  
て……！救急車は呼んだ！でも来ない！「五分で着く」って言  
ったのに！手、冷たい……胸は動いてるけど、呼吸が苦しそ  
う。ねえ、揺らしていい？そのまま？心臓マッサージ？今、こ  
こで？

## 第五場…あこの過去

あこの母のモノローグ。

母

晃子は、毎朝、鏡の前で笑ってました。「私は大丈夫」「私は大丈夫」って。アイドルの真似かと思ってたんです。

声

「ブス！」「ちび！」「死ね！」

母

違いました。あの子は、学校で浴びせられる言葉と…毎日、戦  
っていたんです。

声

「ぶりっ子！」「気持ち悪い！」

母

晃子は声と、喋り方をバカにされているようでした。私は怒鳴  
りました。「学校行きなさい！」って。

少女の声

クソババア！誰も産んでなんて頼んでない！

母

親に向かって、なんてことを…！

少女の声

うるせえんだよ！お父さんだって、本当の父親じゃないくせ  
に！黙って、隠して…ずっと嘘ついてきたんだろ！

母

晃子！！

少女の声

黙れ！うるさい、うるさい、うるさい！！

母

あの頃、私は毎晩、晃子に殺される夢を見ました。包丁を持っ  
て、私に迫ってくる夢。夢の中のあの子の目が、忘れられませ  
ん。

照明変化。

母 晃子は「歳で家を出た。「誰にも愛されていない」って思い込んで

だま。

川澄の声 あきちゃんの笑顔に、会いに行ってるんだよ。

母 晃子は、「私らしく生きたい」って、…ずっと…そう願ってた

んじゃないかしら。

川澄の声 あきちゃん…ありがとうね、頑張れよ。

モノローグに重ねて、リアカーを引く車輪の音。

## 第六場…病室

ベッドに横たわる和乃。目を閉じている。修司がドアを押して入る。

修司 母さん…。

和乃、ゆっくり目を開け、修司を見つめる。

和乃 ああ、修司…。

修司 具合は？

和乃 大丈夫よ。ちょっと暑さに負けただけ。…大袈裟にしてくださいね。

修司 そうか…。

和乃

やよちゃんが来るって、張り切りすぎたのね。あの子、びっくりしてたでしょう。

修司

脱水状態で…もし弥生が見つけるのが、遅れてたら…。

修司、ベッド脇に腰を下ろし、しばし沈黙。

和乃

疲れた顔…してるわね…。

修司

病人が、人の心配するなよ。

和乃、かすかに笑い、息を整えて

和乃

ねえ。鞆の中、見てくれない？

バッグの中を探る。小さな包みを取り出す修司。

修司

…最中だ。

和乃

それ、やよちゃんが持つてきてくれたけど、私があんたに送ったの。まだ食べれるかしらね。

和乃、小さく笑う。

和乃

覚えてないかもしれないけど…あんた、それ大好きだったのよ。口のまわりを真っ白にして。

修司

…。

和乃

顔を見せて。

修司、俯いたまま動かない。沈黙。やがてゆっくり顔をあげる。

和乃　くたびれたおじさんになっちゃって…。

修司　悪かったな。

和乃　…私にとっては、いくつになっても…可愛い息子。

修司、言葉が出ない。やがて

修司　母さん……ごめん。

和乃　…ありがとう。来てくれて。

和乃、背もたれに寄りかかり、窓の外的光を浴びる。風がカーテンを揺らす。

弥生が入ってくる。

弥生　お父さん…。

修司　弥生。

少しの間

修司　その…なんだ。…悪かった。

弥生　何が。

修司　いろいろだ。その…色々は色々だ。

弥生　いいよ。…あたしたちのために頑張ってるのは、わかってるから。

修司　…。

弥生

でも…そのせいで、お父さんがずっと険しい顔してんのやなん  
だもん！

和乃

ねえやよちゃん。

弥生

何？

和乃

やよちゃん、最中、好き？

弥生

えー、最中？ダイエット中だからなあ。

和乃

そんなこと言わないで。

弥生

（笑う）

和乃

ほら修司、お茶沸かしてちょうだい。

修司

（軽く笑って）ああ。

賑やかな笑い声。照明変化。

## 第七場…襲主さんの取材

居酒屋『大入』。襲主が焼酎を片手に座っている。

外の蟬の声が少しだけ聞こえる。

洋ちゃん

（大声で）死ぬつもりだった？

襲主

（穏やかに）はい。

洋ちゃん

いや「はい」って。

襲主

八月に死のうと、決めていました。

洋ちゃん

はあ。え？その「八月」っていうのは…

襲主

去年の八月です。

洋ちゃん

なるほど。

洋ちゃん

それは、あの、どの程度…

褓主

どの程度、というと。

洋ちゃん

その、三途の川に足突っ込んでみる、くらいの？

褓主

（穏やかに）冗談を言うタイプに見えますか？

洋ちゃん

あ、いや、すいません。

褓主

ホームセンターでロープを買いました。見つかったときに人を怖がらせないよう、被るための布袋も用意して。

洋ちゃん

川渡る気満々だ。

褓主

ええ。

洋ちゃん

でも、こうして生きていらつしゃると。

褓主

はい。

洋ちゃん

えつと、褓主…さんでしたっけ。

褓主

ホロちゃんと呼んでください。

洋ちゃん

（困惑）あ、わかりました。あの、こんなこと聞きにくいんですが、

褓主

なぜ、生きているのか、ですか？

洋ちゃん

ええ…あ、でも修司が来るまで待とう。もうすぐ着くつて連絡来たんで。

褓主

そうですか。

洋ちゃん

いや、今すぐ聞きたいんですけど。何度も聞くのも悪いかな、と思つて。

褓主

話しますよ。何度でも。…いや、この話は…何度でも、聞いてもらいたいんです。

居酒屋の灯りがすつと落ち、静かな照明があこを照らす。

彼女はゆっくり椅子に腰を下ろし、遠くを見るように話し始める。

若きあこ

（静かに、ためらいながら）襲主さんね、日に日に…身の回りの物を人にあげていくんです。遺品整理、みたいな。でも私…「死なないで」なんて言えなかった。だって、彼の気持ちは固まってる。なんて言ったらいいの？ほら私、動物占いで「デリケートなゾウ」だから。パニックになっても表に出ないタイプなんです。でも、心の中では、どうしよう、どうしようって。

間。深呼吸して、苦笑のように吐き出す

若きあこ

そんな時Facebookで、自殺対策の専門家と繋がったんです。ここにきてくださいつて送られた住所が…雑居ビルの一角で。「本当にここ？カラオケ店でも入ってるんじゃないの？」って。でも引き返せないし、私、デリケートなゾウだから…！

センター内。

臨床心理士

…あこさん、まずは深呼吸してみましょう。

若きあこ

（早口で）どうすればいいか分からなくて、もし間違ったら…私のせいで、その人が…

臨床心理士

いいですか。私たちは専門家です。どうにかしてチームを組んで、支えられる体制を整えます。だから…その人を、ここに連れてきてください。

若きあこ

でも、どうやって。早くしないと…！

臨床心理士

（少し間をとり、優しく）あこさん。一人で背負わなくていいんです。もし、その人が亡くなってしまっても…それは決して、あこさんのせいじゃありません。

沈黙。あこはしばらく言葉を探し、苦しく笑う

若きあこ

……その言葉に、ホッとしたんです。「そっか。自分のせいじゃないんだ」って。でも、ホッとしてる自分がいることが……辛かった。

飛行機の離陸音。

襲主

わあゝ飛行機だあ！

若きあこ

ホロちゃん。さっきまで土砂降りだったのに、着いたら晴れたよ。こんな風に、生きていたら雨も（と言いかけて）

襲主

あこさん見てください！

若きあこ

聞いている？

あこ、仕切り直して。

若きあこ

襲主さんに、命の大切さを知ってほしくて。連れてきたんです、鹿児島県の知覧特攻平和会館。着くまで、目的は内緒で。施設の方もいいんじゃないかと勧めてくれました。――でも。

襲主

（目を輝かせて指を差す）ゼロ戦ですよ、ゼロ戦。これ、プロペラ回るのかな？

若きあこ

（すかさず）だめ、展示物だから。触らないで。

襲主

（キョトンと）あ、はい。

命の尊さを熱弁する学芸員。

学芸員

出撃前の葉書には、こう記されていました。「待ちに待った大命は下りました」。

（少し間をおいて）十九歳。まだ頬に少年の影を残した年齢です。しかし彼は、家族に心配をかけまいと、言葉の端々まで明るく装いました。（観客を見渡すように）飛び立つその朝も、彼は笑顔を絶やさなかった。涙を見せることは、母を悲しめせると知っていたからです。

（声をやや強めて）空から最後に見た故郷。緑の山、青い川。彼らの目には、どれほど美しく映ったことでしょう。（劇的に）生まれ育ち、愛し、二度と帰れぬ故郷の姿。その景色に別れを告げながら、彼らは、命を差し出していったのです。

あこ、襲主を盗み見る。すやすやと眠る襲主。

若きあこ

寝てる！えーなんで寝れるの？この話でなんで寝れるの！

学芸員

ここに残された遺書の多くは「母上様」「父上様」で始まります。彼らが案じたのは、自分の命よりも、家族のこと。そしてこの国の未来と、人々の幸せでした。

若きあこ

（ハンカチで涙を拭い）うう…。って、私が泣いてどうするんだ！

照明変化。

襲主

ふああ……。戦争はよくないですねえ。

若きあこ

寝てたくせに。

襲主

やっぱり、平和が一番。

若きあこ

（抑えて、鋭く）そういうことじゃなくて。

襲主

あこさん。

若きあこ

何？

褻主

売店で、知覧茶が飲めるらしいですよ。行きましょう。

あこ、堪えきれず一歩前に出る

あこ

（大声で）ホロちゃん！！

褻主

なんですか！びっくりしたあ。

あこ

私は……ホロちゃんの借金とか、病気とか、私にはどうにもできない。

でも——あなたがただ生きてるだけで、私は……本当に嬉しいんです！！

間。褻主は口を開けたまま黙り込む。

取材場面に戻る。褻主が焼酎を回しながら、記憶をたどるように話す。

褻主

あこさんが施設の方と、弁護士事務所に連れてってくれたんです。借金は百万円くらいだった。でも、もうどうにもならないって自分で決めつけて、死ぬしかないって追い込んだ。

間

褻主

自分が死んだら、借金が孫に行くかもしれないと聞いて。死ねばそれで終わり。って思ってたのに、孫の顔が浮かんだ……。弁護士さんがね「生活保護は国の迷惑じゃない。休憩するためにあるんです」って。……それを聞いて、休んで、また働けるようになるう。って。

間

襲主

ずっと大病だと思ってたのになあ！病院行ったら「歳ですね」  
ってさ。心も軽くなつて。気づいたら、生きる方向に向かつて  
た。

洋ちゃんのモノローグ。

洋ちゃん

なんだよ、急に。そんな真面目な顔でお礼とか…どうしたんだ  
よ。熱でもあんのか？まさか、豆腐にでも当たったか？

…いや、ありがとうはこっちのセリフだよ。

だってさ、俺、劇団やつてた頃からずっと、お前の書く本、  
大好きだったんだぜ？じゃなきゃ劇団なんてやんねえよ。

気付けば俺も、すっかりおっさんでさ。芝居なんて今じゃ趣味  
みたいなもんだし、昔ほど体力もない。…でも、お前の書く本  
も、俺の芝居も…なんか、熟成されて…いい味が出ちゃってる  
頃じゃない？…は？誰が灰汁だよ、いい出汁が出てんだよ！

だからさ、また書いてくれよ。昔の熱も、今の落ち着きも、全  
部注いでさ。商売用じゃなくて、心からの言葉を待ってる人が  
絶対いる。俺も、その一人だからな。

え？俺の出番もある？…とうふりん？ふぎけんなよ！

照明変化。

襲主

今では週に一度、みんなでカレーを食べたり。映画を見たり。  
カレーが辛過ぎて汗だくになったりね。そんなくならないこと  
で……一緒に生きてる…って思える。

蝉の鳴き声。

襲主

……八月を越えて、翌年でした。あこさんが「生まれ変わった誕生日だね」って。僕は一歳になったんです。

間

襲主

夢ですか。あこさんがいなかったら、僕の命はなかった。だから、大したことはできないけど、一生、あこさんのお手伝いを……あんまり言うとも重い……って怒られそうだな。でも、それくらい気持ちです。

## 第八場…道端

遠くからラッパの音。ゆつくり近づいてくるようだ。

しげ

すずちゃん！

すず

なあに！

しげ

洗濯物干してないで！あこちゃん来たよ！

すず

あらっ！なんでもつと早く教えてくれないの！

しげ

教えたじゃない！あたしすぐ教えたじゃない！

あこ

（リアカーを押しながら）こんにちほ。

しげ

あこちゃん！豆乳ちようだい！

あこ

はあい。

しげ

これでアボカドスムージー作るの！

すず なにしげちゃん、モデルさんみたいなの！

しげ 最近ピラティス始めたからね！

すず ティラミス？

しげ ティラピス！じゃないピラティス！

すず ホットヨガはやめたの？

しげ 今度は続けるよ。朝にアサイーも食べてるから！

すず やっだこの人！朝にアサイーだって、おつかしい！

十蔵とゆかりがやってくる。

十蔵 あこー。

あこ 十蔵さん。ゆかりさんも。

ゆかり こんにちはあ。

十蔵 さつきな、あつちにたぬきがいたぞ。

すず・しげ たぬき！？

ゆかり 違うわよお、猫ちゃんよ。茶色い猫。

十蔵 いんや、あれはたぬきだ。

ゆかり たぬきみたいな猫よ。

十蔵 猫みたいなたぬきだ。

ゆかり たぬき寄りの猫。

十蔵 猫寄りのたぬき！

しげ どっちだっついていいわ！

十蔵 たぬこ！

しげ

は!?

そこへ、修司が現れる。

修司

……こんにちは。

場がずっと静まり、笑いが途切れる。視線が修司に集まる。

すず

……来たんだ。

修司、ただ立ち尽くす。居心地の悪さが場に満ちる。

あこ

(おずおずと) ……はじめまして。原田さん、ですね。

修司

ええ。

奥様が、豆乳を買いにいらして……そのとき、お名前を。

修司

すみません。ご挨拶が遅れました。

ゆかり

……どなた?

ゆかりは笑顔のまま、首を傾げる。

修司

(戸惑い) えっ……ゆかりさん。原田です。原田修司。

ゆかり

原田さん。

修司

いやあの、この間、お話を…。

ゆかり

ああ、そう。……ごめんなさいね。

十蔵

……気にするな。最近、こういうことがよくあるんだ。

修司

……。

しげ

何しにきたの。(修司から目を逸らし) ネタは取ったでしょ。

修司

それは…

少しの間。

あこ

原田さん。すぐ近くに、池のある公園があるんです。…少し、歩きませんか？

場面転換。夕暮れ。池のほとり。虫の声。修司とあこが並んで座る。

修司

……今日は、取材じゃなくて。謝りたくて来ました。

修司、コピー用紙の束を取り出す。

あこ

できたんですか？

修司

はい。…最初に読んでほしくて。

あこ、受け取る。

あこ

ありがとうございます。

修司

書き始めた時、あなたの言葉を、俺のエゴで…ねじ曲げてしまった。

あこは静かに聞いている。

修司

もちろん、書き直しました。……僕が向き合わなきゃいけないのは――自分のほうだったんです。あなたが、気づかせてくれた。

あこ

昔の話、してもいいですか。少し長くなりますが。

修司

聞かせてください。

あこ

豆腐の引き売りを始めた頃、一人暮らしのおばあちゃんがいました。毎日通る道にあるお家で、顔は知ってた。でも、それだけでした。

間

あこ

ある日、ふとその家を見たら、真っ白だったはずのカーテンが、黒いんです。あれ？って…。

短い間

あこ

…ハエでした。…びつしりと。

修司

…。

あこ

「こんにちは」って、たった一言でも声をかけられる仲だったら、もっと早く、気づけたんじゃないかって。今でも、その黒いカーテンが頭から離れないんです。

修司

……。

あこ

それから思うようになりました。売るとか買うとかじゃない。ただそこにいて、声をかけること。それだけで…誰かを救えるかもしれない。

修司

あこさんが、お豆腐と一緒に運んできたのは…

短い間

修司　笑顔、ですね。

あこ　ええ。ありきたりですけど。

あこ、鞆から封筒を取り出す。

修司　これは…？

あこ　磯崎さんからいただいた手紙です。

修司　ああ…山登りの。なぜ私に？

あこ　困ったときに何度も読み返しました。原田さんにも…きつと、力になると思つて。

修司、驚きつつ封筒を受け取る。

修司　…ありがとう。

照明が落ち、舞台上に別の声——磯崎本人の朗読が響く。

次第に、修司が出会った人々の声が重なっていく。

磯崎　いつもご苦労さまです。

先日、君に助けられたと言つたよね。

その時、不思議そうな顔をしてたよね

川澄　君と出逢つたころ

それまで26年も付き合っていた女性が

ネパールの山で雪崩に巻き込まれて死んだんだ

心の中は真っ暗だった。

すず

その頃、君と出会って

いつしかお父さんと呼ばれるようになった。

襲主

忘れることはできないけれど、このままではいけない。

心の中が一気に晴れたような気がして

物事が少しずつ前向きに考えられるようになったんだ。

しげ

その女性の娘が、晃子と言って

君と同じ名前だったことも巡り合わせなんだと感じた。

十蔵

はじめて言葉を交わした時のこと覚えているかな？

あの時真っ直ぐ自分の目を覷て、君は答えてくれた。

ゆかり

それで、この娘は素直ないい娘だと直感したよ！

磯崎

これから寒くなるけど、健康に気をつけて。

全員

いつでも見守っているからね。

磯崎

江北のお父さんより

## 第九場…白い舟

夕暮れの町角。

風がそよぎ、遠くから虫の声。ベンチに座るあこと修司。脚本を読むあこ。

修司

読むの、早いですね。

あこ

すごいなあ。川澄さんなんて、そのまんまじゃないですか。その場にいたみたい。

修司

みんなが、あなたのことを話してくれましたから。

あこ

（表紙のタイトルを見て）『白い舟』…。

修司

気になりますか？

あこ

白って…お豆腐の色ですね。…それから、お別れの時にかける布の色…。

沈黙。ラップがかすかに響く。

修司

本番、ご招待します。よければ、みなさんで。

あこ

みんな喜びます。あつ、両親も呼んでいいですか？

修司

もちろん。

あこ

いろいろあつたけど…今は、一番の応援団なんです。

修司

それは、よかった。

あこ、リアカーの手綱を修司に示す。

あこ

…リアカー、引いてみますか？

風に乗って、遠くで虫の声が続く。

修司

思ったより、重いんですね。

あこ

ずっとこれで運んできました。お豆腐を運んで、たくさんの人を見送ってきた。…これから。

風が吹き抜ける

修司 舟みたいですネ。

あこ ええ。私も…揺れながら、ここまで来ました。

修司 舟は、誰でも乗りますから。

あこ (微笑んで) だから、寂しくないんです。

修司 豆腐も誰かと食べた方が美味しいし。

あこ ふふつ、そんな締め方ですか。

夕日が柔らかく町を染める。

リアカーの車輪が軋む音と、遠くの虫の声だけが響く。暗転。

終

「あこのありが豆腐～白い舟～」